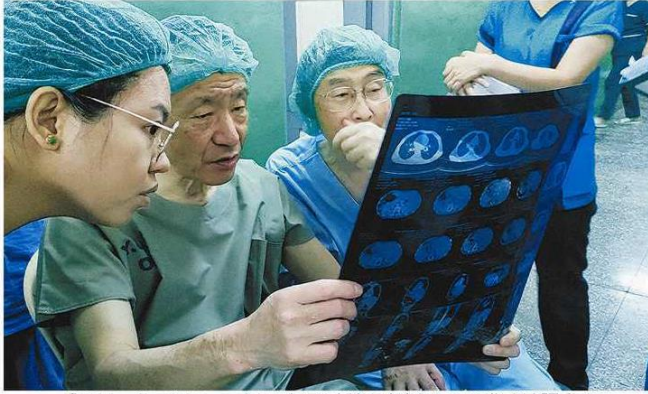


日本人のベテラン小児外科医2人が6月上旬、ミャンマー最大都市ヤンゴンの小児専門病院で、肝臓や胆道に疾患を抱える小児患者4人を手術した。2021年のクーデター後、現地の医療機関では医師や看護師らの不足が深刻化しており、手術を待つ患者が増えているという。2人は「自分たちの技術をミャンマーの子どもたちのために生かしたい」と語る。(バンコク・藤川大樹)

日本人医師2人、現地で執刀



①6日、ミャンマー・ヤンゴンの病院で患者のCT画像を確認する田口医師（左から2人目）と猪股医師（同3人目）

②6日、手術する田口医師と猪股医師



田口さんは九州大大学院教授だった一六年、ジャバ
ンハートの活動に賛同して
協力を始めた。二〇年二月
までに計十回にわたりミヤ
ンマーを訪れ、生体肝移植
手術の支援などを行ってき
た。しかし新型コロナウイルス
の感染拡大に加え、国
軍によるクーデターが起
き、二一年以降は訪問が途
絶えていた。

二人は、福岡医療短期大
の田口智章学長と熊本
ス、カンボジアで医療活動
を続けるNPO法人「ジャ
バ

パンハート」(東京都台東
区、吉岡春菜理事長)が、
ミャンマー訪問を要請し
た。

ミャンマーの子に手術を

政変後に医師・看護師不足

コロナ禍が落ち着いたこ
とから、田口さんは今回、
現地の状況を把握するた
め、生体肝移植手術の第一
人者である猪股さんととも
に現地入りした。ヤンゴン
の小児専門病院で六月六、
七の両日、肝臓でつづられ
る胆汁の流れが滞る難病
「胆道閉鎖症」を患う乳児
など患者四人の手術を行っ
た。現地の若い医師らが技



5日、ミャンマー・ヤンゴンの病院で、2019年に生体肝移植を受
けた患者を診察する猪股医師をいづれもジャパンハート提供

術を学ぶために、手術に立
ち会った。
田口さんによると、前回
訪問時と比べ、この病院で
は小児外科医など医療従事
者が三分の一程度に減り、
手術件数は年間六千件から
千五百件程度まで落ち込ん
でいた。胆道閉鎖症は生後
二〜三月月での手術が適切
とされるが、診断が遅れて
しまった患者も複数いたと

いう。田口さんは「この時
期に手術をして助かる見込
みのあるケースを選んだ」
と苦渋の決断を語る。
初めてのミャンマー訪問
となった猪股さんは「医療
従事者が少なく、いくつか
の病棟や集中治療室(IC
U)は閉鎖されていた。か
なり厳しい状況だった」と
話し、医療体制の整備や人
手不足解消の必要性を指摘
した。二人は今後も要請が
あれば、ミャンマーへの支
援を続ける意向だ。
ジャパンハートは〇四年
から、北西部ザカイン地域
で私立病院「ワツチェ慈善
病院」の一角を借りて活動
している。主に現地の医師
や看護師によって十八歳以
下には無償で医療を提供し
ており、定期的に日本の医
師らを派遣している。

